介添え

2015/4/24

＜一般的な心得＞（弓道教本第１巻より）

(一)射手の所作を熟知し、みずからも作法に明るく射に練達していて、いつでも射手をつとめうる人であること。

(二)常に射手の行動に注意し、適当に射手を補佐する役であるが、射手はなるべく介添えの補佐を受けないように行動すべきで、介添えも必要以上に行動してはならない。

射手を引立てるように努めること。

(三)常に射手の陰にあって低きにつき、目立たぬように行動すること。

介添えが大きな所作や目立つような行動をすることは、厳に慎まねばならない。

(四)射手を中心として間合い・気合いが完全に一致し、渾然一体となって両者の間に少しの隙もないように心がけること。

→要するに…

・自分も射手であるかのような心構えで臨む。

・射手に従って行動する。

・目立つような行動は慎む。

・他の射手に邪魔にならないようにすることが第一。

・会場全体に気を配る。

＜競技での動き＞

・全ての団体・個人選手が全員入場してから入場する。

・第一控えにいる時は、射場に入場後座る位置の後方延長線上に座る。（団体戦）

・女子団体では中と落ちの間、男子団体では二的と三的の間と四的と落ち前の間に座る。（介添えは二人）個人戦では、射手の後ろに座る。複数いる場合は中心に近い位置に座る。

※控えの人用に椅子が置いてある場合はその少し前に座って第一控えの選手の入場の邪魔にならないようにする。

※個人戦での座る位置は状況によって変わることも多いので臨機応変に行動する事が大切。

・団体戦では落ちが３本目を離れたら退場する。個人戦の射詰めでは進行係の指示に従って退場する。退場する時は右足から後ろに出して第一控えの椅子の後ろまで控えの選手の邪魔にならないように注意しながら下がり、そこから最短距離で退場する。

・行射中に的ズレや危険矢等の不足の事態が起こった場合は、積極的に進行係に進言し、改善を求める。

・退場後、必要ならば記録係に的中確認をしてもらうように動く。的中に不服がある場合は積極的に記録係や進行係に進言する。

＜介添えのポイント＞

・歩いている時、手は太ももの前辺りに置いて少し丸みを持たせる。中指が足の真ん中を向くような角度を作る。執り弓の姿勢のように肘を張る必要はない。男子は足を並行に、女子は足を閉じて歩く。

・座っている時も同様に替え弦は持ったまま。座る時は跪坐ではなく正座。座った時は女子は膝頭をつけ、男子はこぶし一つ分空けておく。

・射手との会話や目配せなどはせず、矢を渡す際や弦切れ等が起こった場合を除いて射手とは一切関わらない。

・個人戦の射詰めで矢を持って入場する際には、矢の羽が上座にくるように(体の右側に羽がくるように)持つ。入場後矢の持ち方は変えない。矢は射手に選ばせて射手の右手に後ろから渡す。

・弦切れが起こった場合介添えは進行係に進言し替え弦を張るが、この時射手とコンタクトを取ってはいけない為進行係を介して弓を受け取る。弓を受け取ったら弦を張って進行係に渡し、進行係が射手に弓を渡す。進行係についての所作は後述。

・弦を張る際は替え弦の上輪を弦巻から出しておき、上輪をうらはずに引っかけてから弦巻を回して弦を出していき張る。

・介添えは邪魔にならないように行動する事や、迅速に行動する事が大切である。この事を基本として、状況に応じて臨機応変に行動する事が肝要である。